

随 想

教育は人なり

林 文子

〔教育は人なり〕

教育とは、教え育てるのでなく、育てるものである。教育とは、引き出すものであるか、育てるものである。教えることを強調してはならない。教育を「教化」と誤解してはいけない。

日本学術会議会員、東大名誉教授大田幸先生（教育学）によれば、人間の長を次の世代に伝えていくことが教育である。好奇心・分別力・想像力についてみると、動物の持っている好奇心を鼓舞すると、物と物を分別する分別力、物と物を関係づける想像力が生まれる。さらに、外からの刺激（問）に対し、答える（反応する）。この間と答えの間の分別・選択に好奇心が連繋する。つまり人間は、何種類も反応を思い浮かべて、分別、選択して、一つにする。

つまり、教育の心は、間と答の間を大切にすること。ねんごろに分別、選択する心を育てていく（探求心を育てる）ことが大切であると。

〔トシのとりかた〕

「如何にも御尤もの話」の受け売りで紙面を汚すのは、気恥ずかしいが、大自然のライフサイクルのように、人生にも〔周期〕がある。それが〔還暦〕60才に当たると言う。60才を喜んで、待つて迎えた、ましてや、選択したわけでもないのに、私も人並に還暦を迎え、過ぎ去った。

もう一つの「人生の区切り」として、〔定年退職〕がある。これから老いる。キャリアを活かして、冴えて生きるトシの取り方が、この先努めることが出来るだろうか。

1987. 5.

〔散慮消遥〕

言葉を選ばず、時と所を弁えず、思った通りに物言うは、往々にして誤解を生む。また分別が足りないとも思われ勝ちだが、真に「言いたいことは明日言え」の諺に照してみても剣呑なことが多い。歳月を経て、私なりに今更のよう

に思うことは、多くの人々との触れ合いの中で、このような我が儘な失礼を重ねている。恥り入りながら、戸惑いがよぎる。

「対話」の言葉は、物事のなりゆきなので言葉尻をとらえて争うのは、愚（の骨頂）かなことなのだが。それよりも「物事の本質」を探り出すことに頭を傾けたい。

人皆、「生きる」ための「努力」をしている。ということが、真に理解し難くて、何事にも「厳しく」対処してきた。味わいのある、温かみのある余韻を残すような、大らかさを持ちたい、と切にねがう。

1988. 2.

[空]

時折、着陸体勢に入った飛行機が、小牧空港に降りるのを待って、旋回しているのを、3階の講義室の北の窓から眺めることがある。エンジンを絞って揚力を頼って、静かに浮かんでいる瞬間が懐しい。操縦桿を握りラダに足を乗せて、タワーとの交信も済んで、ランディングを待つ空間は、清々しく晴れ渡り、限りない青の広がり、私の心の隅々まで生気を吹込んでくれる。

この爽快さを満喫できる清潔な空間も、国際線の乗り入れの影響を受けて、のんびり、ぽっかり羽根をひろげて浮揚できなくなって久しい。人々の暮らしの忙しさが空まで生活の屋根に葺き替えてしまったような、透き間のない眺めが多くなった。

1988. 11.

(健康文化振興財団理事長・名古屋大学医療技術短期大学部教授)